

大正文壇の成立

『明星』

— われらは墮落せる国民の嗜好を高上ならしめんがために、文学美術等の上より新趣味の普及せんことを願ひて、雑誌「明星」を公にす。(『新詩社清規』6号)



一條成美



藤島武二



画文共鳴『みだれ髪』から『月に吠える』へ、木股知史
和田英作 (終刊号原画) 岩波書店, 2008





左：図1 「明星」7号表紙 一條成美
中央：図2 中宮寺菩薩半跏像(伝如意輪観音像)
右：図3 「巻タバコ用紙ジョブ」ポスター ミュシャ



左：図4 「明星」11号表紙 藤島武二

中央：図5 「レスタンプ・モデルヌ」表紙下絵 ミュシヤ

右：図6 「サラ・ベルナール」ポスター ミュシヤ

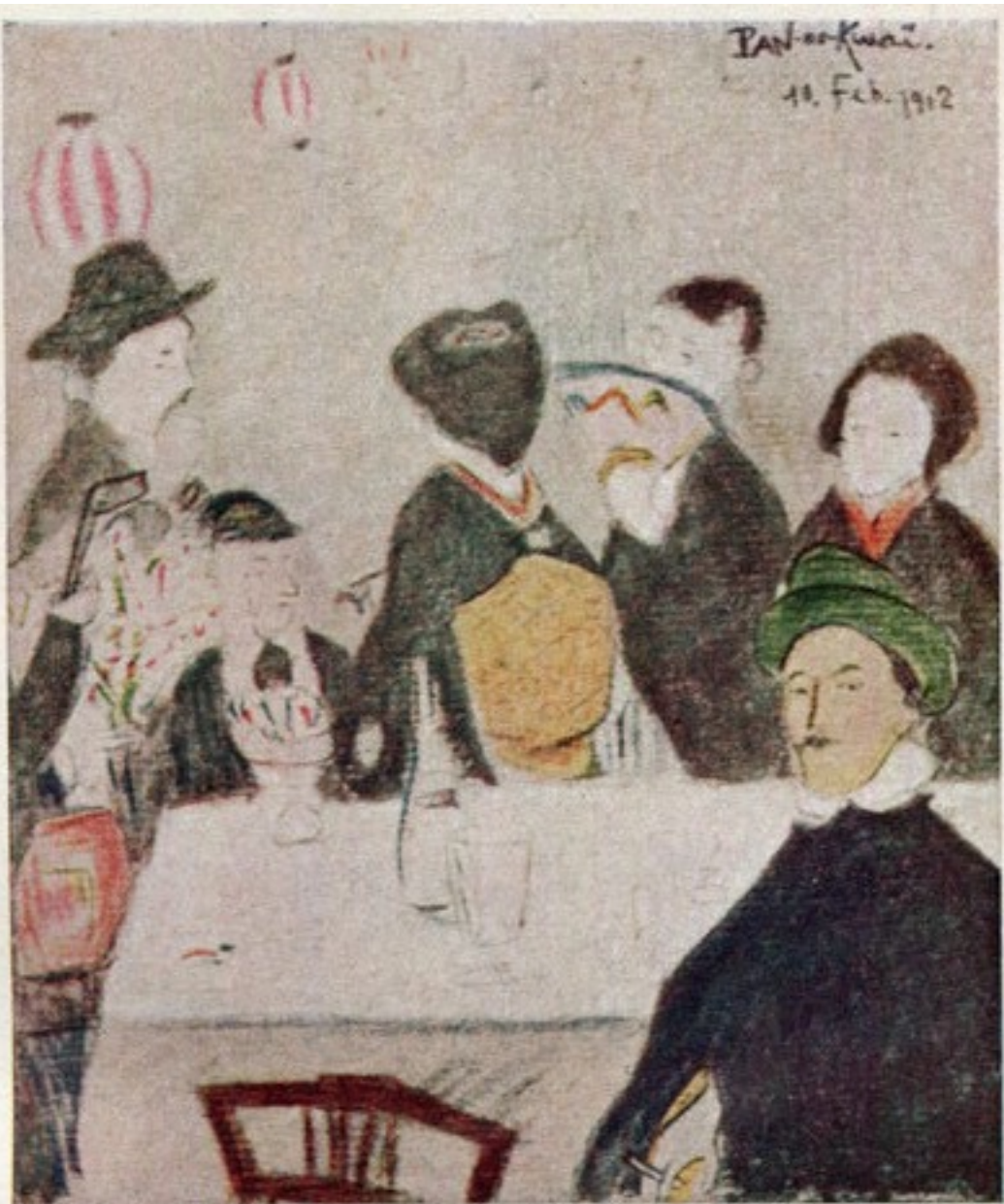
パンの会 1908.12-

PAN- no-Kwai

何でも明治四十二年頃、石井、山本、倉田などの「方寸」を
経営してゐる連中と行き来し、日本にはカフェエといふものが
なく、随つてカフェエ情調などといふものがないが、さういふ
ものを一つ興して見ようぢやないかといふのが話のもとであつ
た。当時我々は印象派に関する画論や、歴史を好んで読み、又
一方からは、上田敏氏が活動せられた時代で、その翻訳などか
らの影響で、巴里の美術家や詩人などの生活を空想し、そのま
ねをして見たかつたのだつた。

是れと同時に浮世絵などを通じ、江戸趣味がしきりに我々の
心を動かした。で畢竟パンの会は、江戸情調的異国情調的憧憬
の産物であつたのである。

木下杢太郎「パンの会の回想」

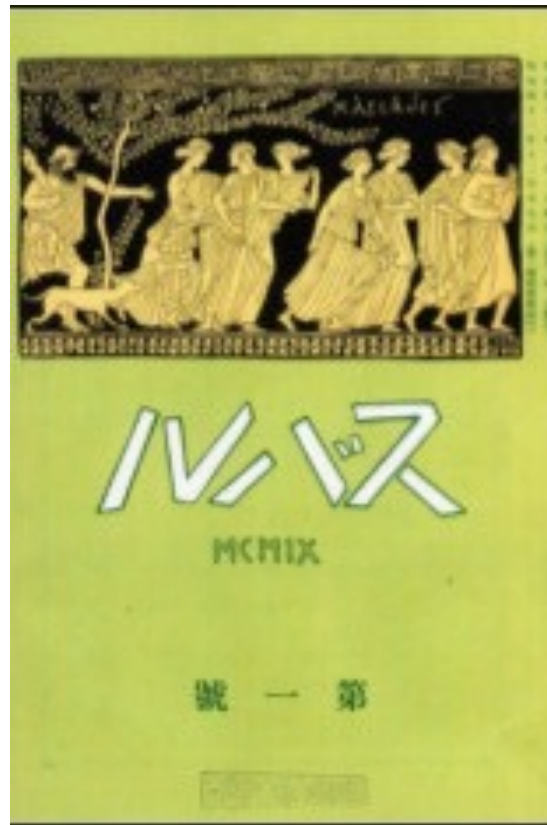


画・木下杢太郎『食後の唄』,1919

耽美派の誕生



1907.5-1911.7



1909.1-1913.12



1910.5-

谷崎潤一郎 『刺青』

『この絵は刺青と一緒に前にお前にやるから、其れを持ってもう帰るがい』

こう云って清吉は巻物を女の前にさし置いた。

「親方、私はもう今迄のような臆病な心を、さらりと捨ててしまいました。——お前さんは真先に私の肥料になったんだねえ」

と、女は剣のような瞳を輝かした。その耳には凱歌の音がひびいて居た。

「帰る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ」

清吉はこう云った。

女は黙って頷いて肌を脱いだ。折から朝日が刺青の面おもてにさして、女の背は燦爛とした。



『新潮日本文学アルバム7 谷崎潤一郎』(新潮社 1985年1月)より

白樺 1910.4-1923.8



著作権の都合により
画像を削除しました

著作権の都合により
画像を削除しました

後列：志賀直哉、里見弴
前列：田中雨村、武者小路実篤、

有島武郎と有島生馬

白樺派と美術

- ロダン、ルノアール、マネ、ゴッホ、セザンヌ、ゴーガンといった印象派・後期印象派の絵画、ラファエロ、ダヴィンチ、ミケランジェロなどのルネサンスの画家、クリンガー、ビアズリー、クリムト、ムンク、ルドン、ホドラーなどの世紀末 象徴主義の絵画、古代ギリシア・エジプトの彫刻、日本の古寺の仏像や朝鮮李朝陶器といった東洋美術の作品まで。
- 複製図版を「挿画」として毎号の誌面に。その鑑賞や解説、芸術家の評伝や批評を掲載。
- ロダン、ルノアール、ゴッホなどについては、特集号。
- 展覧会の主催、1921年3月に第1回。以後18回。



セザンヌ 砂糖壺、梨とテーブルクロス 1893-94



セザンヌ、風景 1885-87



ロダン 接吻 1886

* 「技巧よりも人に重きを置きたがる白樺同人」
(武者小路実篤、『白樺』1911.5)
画家の人格に共鳴
作品 = 人格の顕現

その他の大正の文学



遊蕩文學の撲滅

赤木桁平

『読売新聞』1916.8.6,8

等自身は現實的と云ふを欲するであらうが、決して現實的とは云へない）であり、主情的であり、享樂的であり、片面的であり、頹廢的である。然のみならず、かくのごとき彼等の人生觀的傾向は、内部生命の必然なる要求に解まれた誠實なる體驗と精到なる思索との修鍊を經由したる生活經驗の所産ではなくて、多くは個人の氣質に培はれた趣味的の發露たるに過ぎないから、嚴密なる意味に於いて、彼等自身のものではない。——彼等の文學が概ね輕佻浮華の色を帯び、藝術の本質を閑却して、常に彫琢の末技をのみ趁はんとする傾向を有するものは、全くこの原因

から、藝術自身に對する批評なり評價なりを到底前者の藝術的境地から汲み取ることは出來ない。現や前者の藝術的境地は與へられたる人生を生々しき現實に於いて凝視するよりも、寧ろ一種の回避的態度に依つて、これを朦朧たる意識の裡に誤魔化し去らんとするものであるから、人生の眞實味に根したものと云ては、殆んど何物をも見出すことは出來ない。

なことに由るであらうが、その原因の一半は、儘に生活上の經濟的壓迫に強ひられて、むしろ一般の好尚に迎合すべく、通俗的方面に最後の活路を見出さうとするところにあらう。この事實などは明かに「遊蕩文學」の惡影響を立證するものであつて、善藝術の健全なる發達と繁榮とを祈念するものにとつては、輕々しく看過しがたい重大問題である。こ

文学は男の仕事か？

大正

明治30年代

男の仕事 = 金



文人
= 天職
矜持・劣等感

明治40年代

男の仕事

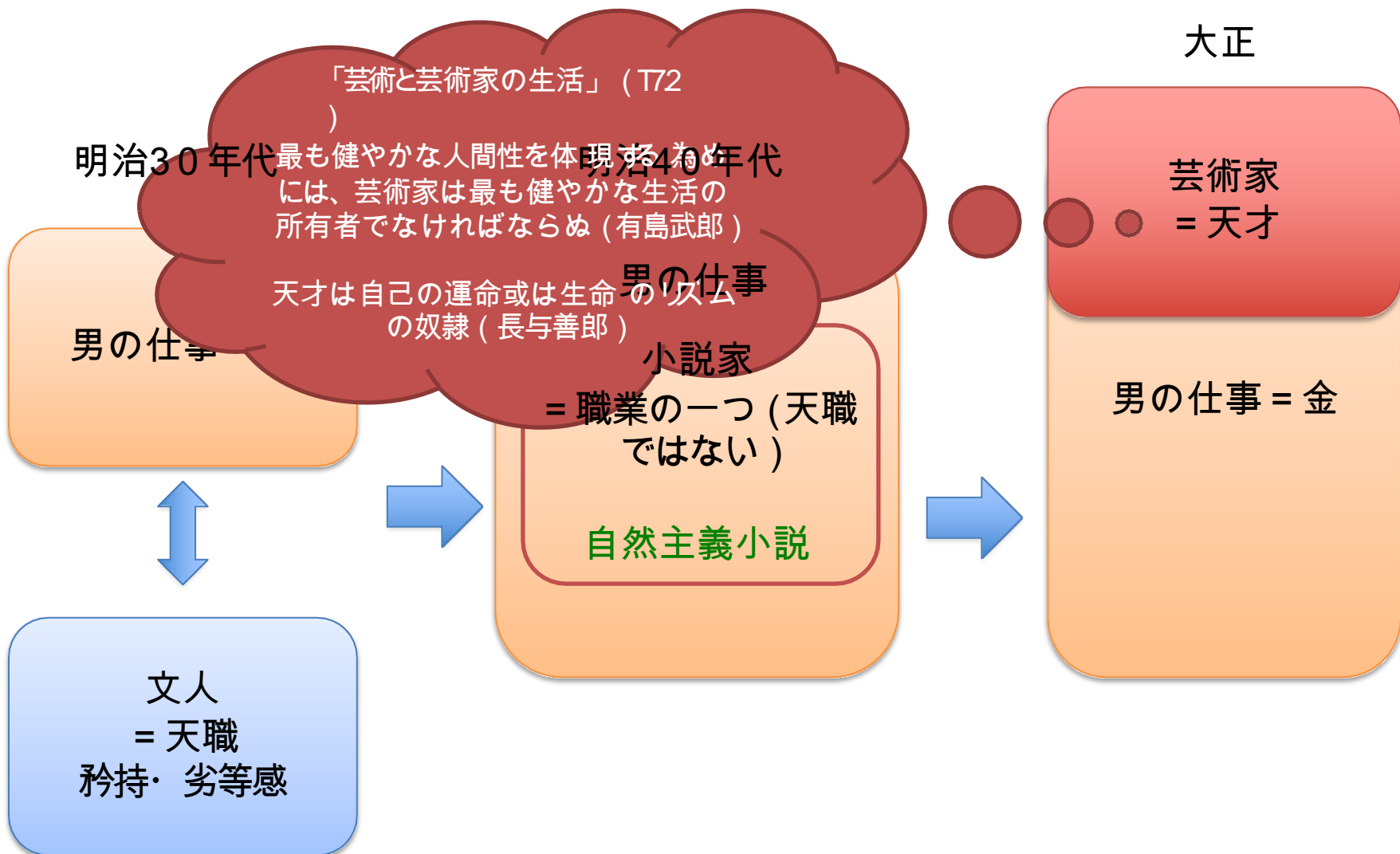
小説家
= 職業の一つ (天職
ではない)

自然主義小説

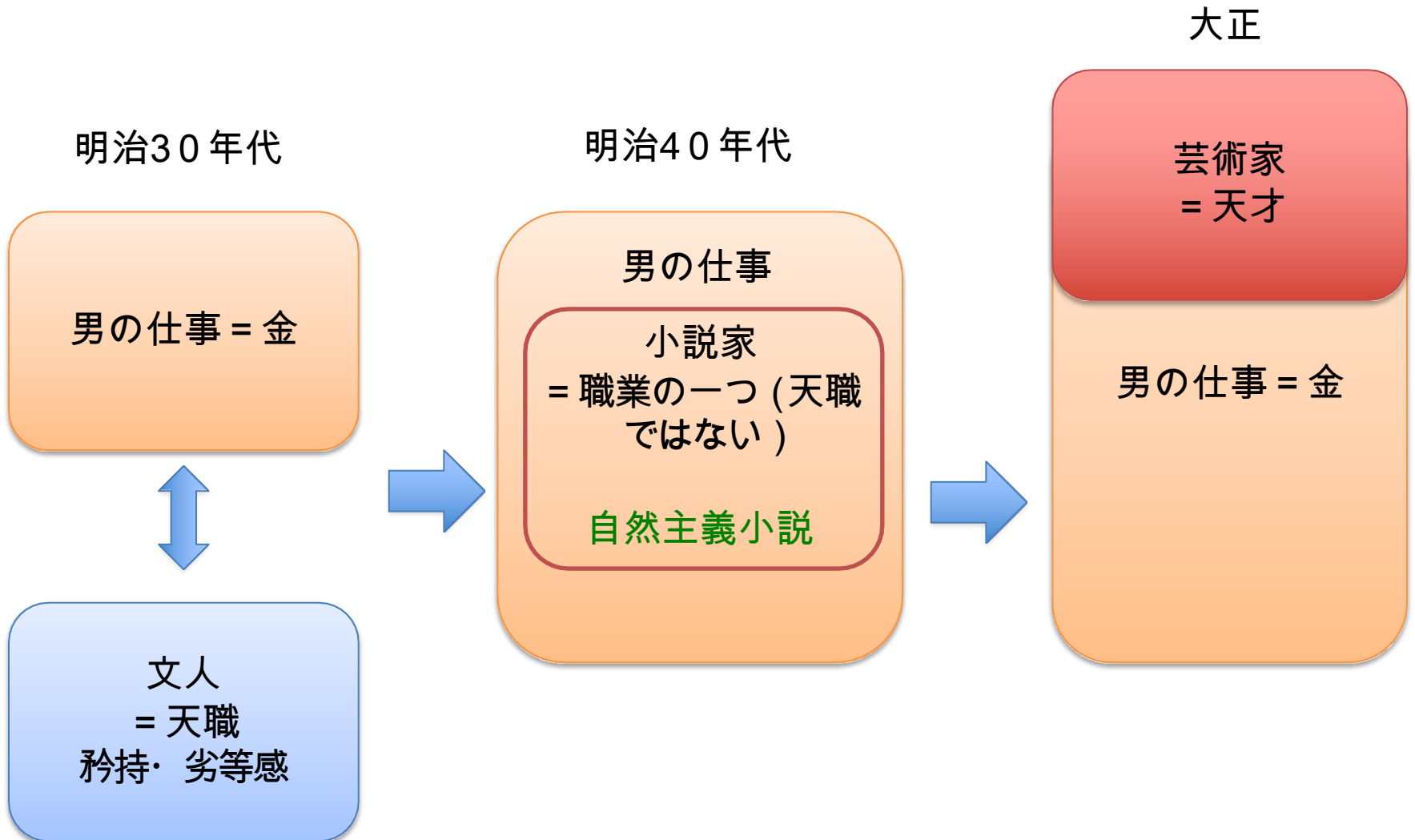


男の仕事 = 金

文学は男の仕事か？



文学は男の仕事か？



まとめ

- 耽美：美術 + 文学
- 大正教養主義
- 人格主義
- 生命主義
- 芸術としての文学